本格的に仕事を始められたのであるが，この間我々がモタモタしている間に世界で，特にアメリカで赤外線天文学は怖るべき勢いで発展していったのであった．この事態をなんとか切り開き，世界に追いつき，追い越そうとの精神のもとに構想されたのが，上松の 1m 赤外望遠鏡であった．(天文月報 1973 年 11 月号参照) この望遠鏡は科研費で作られたために人員，維持費とも 0 であり，このため建設，その後の保守管理，実際の観測に京都の人達が払った努力は大変なものであった．しかしその努力の結果この望遠鏡は着実に成果をあげすこぶる多産性であることを示した．「日本にも赤外線天文学あり」ということを世界に示した点に於てこの望遠鏡は日本の赤外天文の一時期を画したものといえるであろう．

上松の仕事は多様なものであるが，奥田グループの興味の中心には赤外天文の主要テーマの一つである「塵」があるように思われる．彗星，新星，赤外線星，銀河中心等の測光，偏光観測は塵の生成，光学的性質，星間空間内での分布等を知る上に大変興味深いものである．炭素星での 3 μm 吸収線の発見も出発は星間塵中の水を見出すことであった．また 10 ミクロン帯での CRL 天体のサーベイとその測光，偏光観測等のその他の京大赤外グループの一連の仕事をみると，その時々の世界の赤外天文の中心テーマをとりあげ，第1線の仕事をしようという意欲が強く感じられるのである．

このような地上の仕事のみならず，赤外天文に欠くべからざる上空観測にも意欲を示され，銀河の気球観測を精力的に進めておられる．

日本の赤外天文は上空の仕事を含めてやっと一人前になったかどうかというところであろう．一方世界では赤外は天文研究のための一つの手段として定着しつつあり，これまでの可視域のみによる場合と比べて情報量の飛躍的増大をもたらしている．この赤外観測の重要性はよく認識されており，大型赤外望遠鏡が続々と建設され，人工衛星，スペースシャトルによる観測計画も具体化しつつある．観測内容でいえば，分光観測が今や不可欠となりつつあること，遠赤外，サブミリの観測が重要な部分を占めつつあること等がその特長であろう．

京大赤外グループでは現在第世代の大型望遠鏡を建設することが計画されている．また，気球観測も発展させ，遠赤外での観測を計画されていると聞く．我々各大グループも主として上空観測に於て赤外天文の一端を担うべく，各種計画を考えているし，東大天文学教室では BAT II の大計画が進行中である．これらの計画が実現し，我が国の赤外線天文学の水準を世界に誇ることができる日が一日でも早くくることを願ってやまない．

（名大理・松本敏雄）

掲　示　板

国際機関の専門家の募集について

外務省国連局の国際人事センターより国連等の国際機関の事務局・フィールド専門家の空席公告（契約は約2年）が学会宛に来ています．気象関係・コンピューター関係等の専門家の募集も 2〜3 あるようです．多くは 10 年以上の専門的経験があって 35 才以上の人を対象とし，応募の締切も9月中がほとんどのようですが，詳しい情報を入手されたい方は

国際機関人事センター
〒100　千代田区霞ケ関 2-21-1
電話　03-580-3311 (内線 2840)

にご照会下さい．

☆　☆　☆

1977 年 7 月の太陽黒点 (g, f)（東京天文台）

1	—,	—	6	—,	—	11	1,	3	16	0,	0	21	2,	5	26	5,	25
2	2,	40	7	3,	18	12	1,	8	17	0,	0	22	2,	6	27	6,	17
3	3,	25	8	2,	18	13	1,	10	18	0,	0	23	6,	14	28	3,	12
4	3,	31	9	2,	10	14	1,	4	19	0,	0	24	3,	13	29	4,	13
5	4,	21	10	2,	5	15	0,	0	20	—,	—	25	2,	11	30	3,	6
															31	1,	1

（相対数月平均値: 24.1）

昭和52年9月20日 印刷発行　発行人 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 社団法人 日本天文学会
印刷所 〒112 東京都文京区水道 2-7-5 啓文堂松本印刷
定価 300 円　発行所 〒181 東京都三鷹市東京天文台内 社団法人 日本天文学会
電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359　振替口座 東京 6-13592